

海



豊永富佐子

「海が見えた。海が見える。さすがにお芙美さんは、うまいこ

とを言ったものだ。海をながめるよるこびの心が、この五字と五字、たった十字の短いことばの中から、生き生きと、うず潮のように盛りあがってくる。海が見える。海が見えた。これは下関で生まれた作家、いまは亡き林芙美子の『放浪記』の中にある文句だ」最近、私の読んだ新聞にこんな記事がのっていた。

私も若い時に放浪記を読んだが、そんな文句のあったことがよみがえらない。すぐ本を出して一気に読み進んだが、なかなかその文句に出会えなかった。七十頁余り読みふけた時、(八月×日)「海が見えた。海が見える。五年振りに見る、尾道の海はなつかしい」と目にとまった。新聞には、「この海は尾道の海だが、お芙美さんの胸の底の底には、きつと、関門の海が映っていたに

違いない」と続けられていた。

私の勤める幼稚園は、その関門の海を北へ山陰に向う。釣り人がポイントとする岩場や波止場のあるところ。早春とは言っても、まだ季節風の吹き荒れる北浦では、これより以北に、釣り人はなじみ深い、磯場、魚のメッカが点在し、早期からラッキーを求めて釣り人が行く。日本海は春がきて、うねりのような高波が寄せたり、瀬戸内海のようなやさしさが無い。

釣りの話になったのは、こうした荒い海でとれた魚の方がおいしいことを、北浦地方に嫁してから知ったからである。だから私は「海」と言えば活魚を連想する。

動かない海。満潮時の静かな海を見ると、その平らかな海の底にいろいろな魚や海藻、貝類がそれぞれ共存し、自分の生き方をし

ている。不況も無く、交通事故も、進学の苦勞も無い平和が感ぜられる。しかし、海中には海中での生きざま、ルールもあるだろう。釣り人に釣り上げられ、魚が大きい時には成績がよかったと胸を張り、魚が小さい時には釣り人の肩が落ちる。

私はこのことを保育に置きかえてみた。子ども達が自由な活動を楽しんでる。遊びの場を設定し、コーナー、コーナーで遊びが広げられ、子どもの発想で遊びが移行していったりする。その中に教師が立って釣り糸をたれ、ヒントのえさを投げ入れた時、そのえさととびつき、一日のねらいが達成された活動が釣り上げられた時、教師は嬉しく思う。かりにその仕掛けの場作り、配慮、手順など教材研究不足であった時は、糸を通じて感じる感触、手ごたえがなく、小さいものしか釣れずに肩が落ちるだろう。

今一つ「海」と言えば私には、血の気が引く思いの記憶がある。三年前に自閉症児を受け持った。丁度三月であった。二か年の保育によって、母親の付き添いも要らなくなり、園外にとび出すことも無くなっていた或る日、降園前になって姿が見えなくなった。再び園外に出たと直感した。私の足は何故か海の方に向っていた。

浜を見ると、園児服のHが沖に突き出ている波止場の先端に居る。一瞬冷水を浴びた感じがした。「Hちゃん、じっとしていて」

私の声は浜いっぱいに広がった。しかし、呼べば呼ぶ程、突堤の左右へジグザグ。今にも海中に落ちそうになる。つないである漁船に板ばしごがしてあるので渡ろうとする。私の必死の声も自閉症児にはまるで通じない。Hの黄色い帽子がその時海面に落ちて浮いた。Hは浮いている自分の帽子を見つめてやっと止まってくれた。私の手が力いっぱいHの肩をつかんでいた。私の心からしぼる声を海は聞いてくれた。

保育中に時折、風向きによってふっと、潮の香が吹き込んでくる。子ども達は当然のことながら、海、船、浜に関心が深い。美しい貝がら、石などを見つけては見せにくる。海辺の人の気性は歯切れがよい。園児達の父母も、海辺の大自然に育まれた人が多いだらう。なやみがあったら、海辺に立つと治ると地元の人はずう。大海原は人の胸を開き、大きく包み、そして聞いてくれる。寄せては返す波、或る時はさざ波、或る時は大波、そして高波となってしける。保育の中にあつてやはり私たちも波を変ええることを考える。それは活動の中にゆきぶりを与えている。

生活の身边に海がある。日本海は海域、漁場など多くの問題をかかえている。すぐ近くでは原発、海岸汚染を論じられ、争われている事も、聞こえているやら、今日も広い、深い海があり、海が見える。

(山口県・室津幼稚園)